http://www.edu.pref.kagoshima.jp/　（通巻第１６２４号）

指導資料

鹿児島県総合教育センター

複式教育　第 57 号

― 小学校，特別支援学校対象 ―

平成 21 年５月発行

複式学級における間接指導の在り方

－間接指導を効果的に進めるための留意点－

複式学級における学習指導の類型は，学年ごとの指導を主体とする学年別指導と二つの学年を一つの学級とみなして指導する同単元指導に大別される。学年別指導を行う場合は，直接指導と間接指導を組み合わせた授業を行うことになる。間接指導は直接の指導ができない学年に行う指導形態であるが，ややもするとこの時間は漢字練習やドリル学習などの習熟のみの学習の場に陥ってしまうことがある。間接指導を単なる習熟の場としてではなく，「児童の自ら学び自ら考える力をはぐくむ時間」ととらえて指導することが大切である。そのためには，教師の意図的・計画的なかかわりが求められる。

そこで，本稿では間接指導につなげる直接指導の充実，長期的視点に立った学び方の育成，主体的な学びを支える環境構成の視点から，間接指導を効果的に進めるための留意点について述べる。

１　間接指導につなげる直接指導の充実

学年別指導においては，図１のような学習過程で学習を進めることが多い。教師が一方の学年からもう一方の学年へ，直接指導を行うために移動する教師の動きを「わたり」というが，間接指導を「児童の自ら学び自ら考える力をはぐくむ時間」にするためには，「わたり」をする前後の直接指導を充実させることが大切である。

下学年	教師の動き		上学年
課題把握 ①	直接指導	間接指導	適用・発展
課題追究	間接指導	直接指導	課題把握
解決・定着 ②	直接指導	間接指導	課題追究
適用・発展	間接指導	直接指導	解決・定着

図１　基本的な学習過程（例）

(1)　「わたり」前の直接指導における見届け

例えば，下学年の児童が，上学年の直接指導に当たっている教師にたびたび質問を繰り返すために上学年の学習が進めにくくなったり，あるいは間接指導下にあった学年の児童が何をしてよいか分からずにぼんやりしていたりすることなどがある。これらは，児童が間接指導の場で，活動に見通しをもてていないことに起因することが多い。したがって，教師はわたる前に直接指導時の内容等を児童がしっかり理解できているか，間接指導時の活動の見通しをもてているかを見届

けることが大切である。

図１の学習過程では，下学年に①，②で示した２回の直接指導の場があるが，それぞれの場で見届けるべき視点として，以下のようなことが挙げられる。

ア　「課題把握」時の直接指導における見届けの視点例【図１①での見届け】

(ｱ) 学習課題の意味を確実に理解しているか。
(ｲ) 学習の方法や手順などの解決の見通しを明確にもっているか。
　○　何を，どのように，いつまでにまとめればよいのか。
　○　予定していた活動が終わったら，次に何をするのか。
　○　困ったときは，どうすればよいのか。　など

中でも，(ｲ)について見届ける際は，例えば，

・　読み取りの視点を確実に理解して取り組んでいるか。《国語科》
・　具体物，半具体物，図などの，どの方法で取り組もうとしているか。《算数科》

などのように，より具体的な視点を設定して学習状況を見届け，一人一人の児童が自力解決していけるように個別指導を行うことが大切である。

イ　「解決・定着」時の直接指導における見届けの視点例【図１②での見届け】

(ｱ) 新しく獲得した内容をしっかりと理解しているか。
(ｲ) どのような方法で適用・発展させるかを分かっているか。
(ｳ) 予定していた活動が終わったら，次に何をすればよいかを分かっているか。

特に，(ｳ)については，

・　本時の学習範囲を音読する。《国語科》
・　ガイドを中心に，あるいはペアで答え合わせをする。《算数科》

などのように，より具体的に指示することが大切である。

(2)　「わたり」後の直接指導における見取り

過　程	動　き	指導形態
課題把握	直接指導	一斉指導
		個別指導
課題追究	間接指導	自力解決
		相互解決
解決・定着	直接指導	個別指導
		一斉指導
適用・発展	間接指導	自力解決
		相互解決

「個から個へわたる」

図２　「個から個へわたる」

間接指導から直接指導に移ったときには，すぐに一斉指導をするのではなく，「わたり」を行う前に個別指導をした児童の学習状況をワークシートやノートなどから見取ることが大切である（図２）。その際，解決できたことや解決の過程における考え方のよさなどを称賛したり，丸を付けたりしながら，一人一人の思考過程や理解度を把握するとともに，次の一斉指導に役立てるようにすることが大切である。

2　長期的視点に立った学び方の育成

間接指導の場面で，児童が主体的に学習を進めるためには，児童一人一人が「学び方」を身に付けていくことが大切である。そのためには各教科，道徳，外国語活動，総合的な学習の時間，特別活動など，全教育活動の中で計画的に「学び方」を身に付けさせる指導を展開することが求められ

る。複式学級においては，間接指導の場が主体的な学び方を生かす実践の場であり，この場を生かして児童が体験的に学び方を身に付けていくことができるように工夫することが重要である。

児童に身に付けさせたい学び方としては，「基本的な学習技能や態度等」，各教科等の「学習の進め方」，「ガイドの進め方」などが挙げられる。

(1) 「基本的な学習技能・態度等」の育成

間接指導時に児童が自らの力で学習内容を学び取っていくためには，まずその基盤となる発表の仕方や話の聞き方，話合いの仕方，ノートのとり方などの「基本的な学習技能・態度等」を身に付けておく必要がある。そこで，これらを身に付けさせるために，児童の実態を踏まえ，例えば，表１のような指導段階を設定し，計画的に育成していくことが大切である。

表１　「話し方」,「聞き方」指導段階表　（奄美市立宇宿小学校研究紀要を基に作成）

【「話し方」,「聞き方」指導段階表】　　◇　共通指導事項　▽学年別の指導事項

	話　し　方	聞　き　方
低学年	◎　友だちの方を向いて話す。 ▽　～は，～です。 ◇　私は，～だと思います。そのわけは，～だからです。 ◇　私も，○○さんと同じです。 ◇　私は，○○さんと違って，～と思います。 ◇　付け加えます。それは，～です。 ◇　ほかにもあります。それは，～です。	◇　発表する人の方を向き，目を見て聞く。 ▽　発表が終わるまで，黙って聞く。 ▽　聞き取れなかった場合は，「もう一度言ってください。」とか，「もう少し大きな声で言ってください。」などと，聞き直す。 ◇　発表が終わったら，自分の考えと比べて次のように声に出して言う。 ・　「同じです。」 ・　「ほかにもあります。」　・　「付け加えます。」
中学年	◇　私は，～だと思います。そのわけは，～だからです。 ◇　私も，○○さんと同じです。 ◇　私は，○○さんと違って，～と思います。 ◇　付け加えます。それは，～です。	◇　発表する人の方を向き，目を見て聞く。 ▽　自分の考えとの類似点や相違点を考えながら，最後まで聞く。 ▽　発表内容をよく考えながら聞き，理解できる場合は

(2) 「学習の進め方」の定着

児童が進んで学習に取り組めるようにするためには，子どもが学習の手順を理解し，学習に見通しをもてるようにすることが大切である。そのための手助けになるのが「学習の手引き」である（図３）。このような手引きを活用することで，児

算　数　科　の　学　習　の　進　め　方　　高学年用

☆　算数の学習を次のように進めていきましょう☆

つかむ	1　問題をつかむ。 2　めあてを立てる。	○　何を求めるのか，問題をしっかりと読みましょう。 ○　式や解き方を考えましょう。 ○　めあてを考えましょう。 【ポイント】 ・　これまでの学習と同じところはないかな。 ・　これまでの学習と違うところはないかな。 ・　何かきまりがありそうかな。 ○　めあてが決まったら，ノートに書きましょう。（赤の線で囲みましょう。） ・　問題に合っているかな。 ・　解決できそうかな。 ・　一つにまとめられないかな。 ～の～について調べよう（考えよう）。

図３　「学習の手引き」例　（平成 17 年度　奄美市立宇宿小学校研究紀要から）

童は学習内容や方法，手順などを理解することができ，主体的に学習活動を進められるようになることが期待できる。

以上のような学び方は，一朝一夕に身に付くものではない。６年間を見通し，全教職員の共通理解のもと，一つ一つのブロックを積み上げるように系統的かつ組織的に取組を進めていく必要がある。

※　学び方を身に付けさせるためには「ガイド能力」の育成も重要である。このことについては，指導資料第49 号「複式学級におけるガイド学習の進め方」（平成８年 11 月発行）を参照してほしい。

3　主体的な学びを支える環境構成

間接指導時に児童が主体的に学習を進めることができるようにするためには，教室設営や教材・教具などの環境構成を工夫することも大切である。

(1) 学習の進め方を身に付けさせるために

学習の進め方を身に付けさせるためには「学習の手引き」の活用のほか，次のような環境構成をすることも考えられる。

ア　「学習の進め方」表の掲示

「学習の進め方」表を教室に掲示し，学習の進行とともに，児童と学習の進め方を確認しながら進めるようにする。そのことを繰り返すことで，児童は学習の進め方を意識し，学習の進め方を身に付けることができるようになることが期待される（図４）。

図４　「学習の進め方」表

（平成 19 年度 奄美市立宇宿小学校研究紀要から）

イ　各種プレートの活用（図５）

(ｱ) 学習過程プレートの活用

学習過程プレートは単式学級での授業においてもよく活用されている。複式学級においても，例えば，授業の導入ですべてのプレートを黒板に

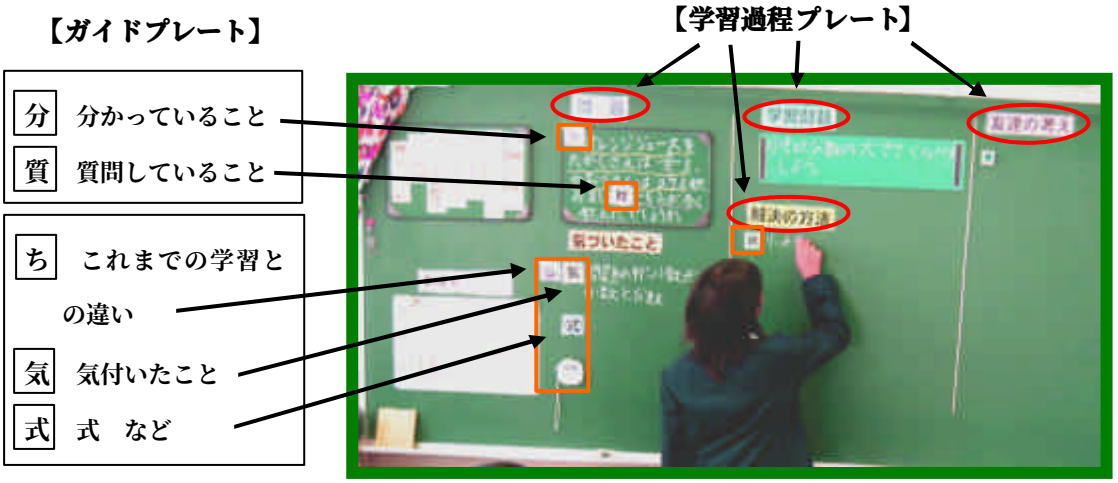

図５　各種プレートの活用例

配置しておくと，児童は学習の流れを視覚的にとらえ,「次は何をすればよい。」などの学習の見通しをもつことができたり,「黒板のどこに何をかけば（あるいは掲示すれば）よい。」ということやノートのまとめ方についても理解できたりするなど，学習の進め方を身に付けさせる手だての一つになると考えられる。

(イ) ガイドプレートの活用

ガイド学習を取り入れる際，例えば算数科であれば問題の構造をとらえさせたり，考える視点をもたせたりするためにガイドプレートを活用させることで，児童が主体的に学習を進める際の一助とすることができる（前ページ図５左）。

ウ　学習計画表の掲示

単元の学習計画表を掲示することによって，児童が単元全体の学習に見通しをもつことができ，問題解決に向けて主体的に学習に取り組むことが期待できる（図６）。

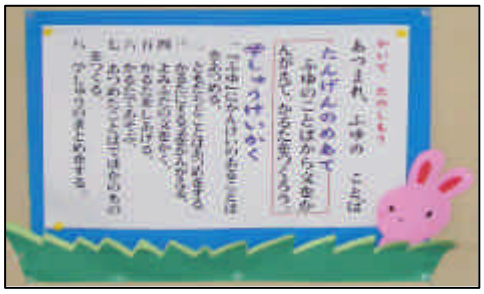

図６　「学習計画表」例（図８－①）

エ　一単位時間における具体的な学習の流れ等の掲示

例えば，国語科の学習であれば，図７のような間接指導時の読みの視点と学習の流れを掲示しておく。音声による指示は消えてしまうが，このように掲示しておくと，児童が読みの視点や学習の流れなどを忘れても，顔を上げればそこに掲示してあることから，それを確認しながら自分で学習を進めることができる。

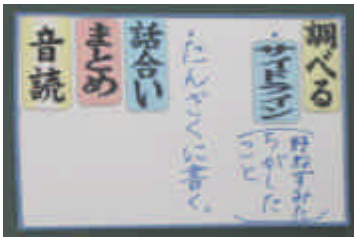

図７　「学習の流れ」例（図８－②）

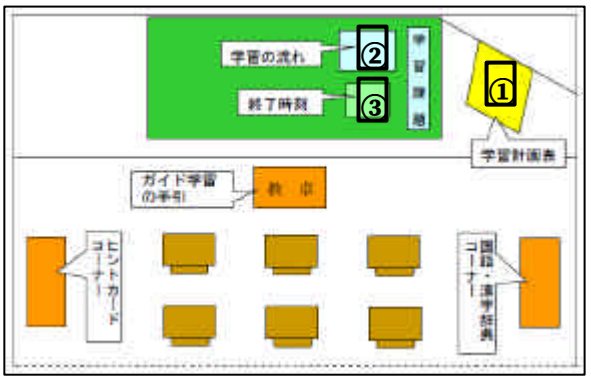

図８　設営例

オ　終了時刻の掲示

図９ 終了時刻の掲示例（図８-③）

間接指導時の課題追究に何分ぐらい必要かを児童に話し合わせ，その終了時刻を掲示しておくことも大切である（図９）。解決に必要な時間を考えさせると，児童は解決すべき内容と自分の力とを照らし合わせて考えることになる。そのこと自体が学習を自分のものとしてとらえる機会になり，ひいては子どもの主体的な学びに資するものと期待される。また，終了時刻

を掲示しておくことで，教師の指示を待つことなく，当該時間内に解決しようという意識をもたせることもできる。

(2) 自力解決を支援するために

少人数であるという利点を生かし，一人調べ時の児童一人一人のつまずきや追究の仕方などを予測し，その内容に応じた環境を整えておくことが大切である。

ア　一人一人のつまずきに備えて

「課題追究」の過程において児童が一人調べをする際，解決の方法が分からなかったり，考えをうまくまとめられなかったりしたときを想定して，解決の手掛かりとなるようなヒントコーナーを配置しておく。

ヒントコーナーの内容としては，

- 本時の学習に生かせる既習事項のヒント
- 必要に応じて活用できる図や式を示したヒントカード
- 具体物を置いたヒント

などが考えられる。（前ページ図８）

イ　一人一人の多様な追究の仕方に応じて

「適用・発展」の過程においては，例えば，

- Ａさんはこの学習を得意としているので，発展的な問題に取り組ませよう。
- Ｂ君はこの学習を苦手としているようなので，補充的な問題を準備しよう。
- Ｃさんは，この学習に大変興味をもっているので，インターネットを利用させて，発展的な課題に取り組ませよう。

などと，一人一人の学習状況に即して以後の学習活動を予測した上で，発展的・補充的問題を準備したり，パソコン，図鑑・事典などの図書資料を準備したりしておくことが大切である。

複式学級を初めて担任すると，「２学年分の教材研究をしなければならない。」，「２学年の授業を同時に進めなければならない。」などといったことに悩むことがある。しかし，少人数であることは一人一人の児童の思いや願いを十分に理解した上で指導に当たることができる“よさ”であり，また，直接指導できない場があることは，学び方を身に付けさせる絶好の機会があるという“よさ”と考えることができる。

このように「個に応じた指導」，「自ら学ぶ力を育てる指導」などの指導の在り方が毎日の実践に息づき，一人一人を生かす教育の原点が複式学習指導にはある。教師自身が「学習指導上の課題」を「複式だからこそできること」としてとらえ直し，前向きな構えで目の前の児童と向かい合っていくことが最も重要なことである。児童の姿やそれを取り巻く環境のすべてをプラス思考でとらえ，児童が生き生きと活動する学習指導が展開されていくことを期待したい。

（教科教育研修課）

※　当教育センターのＷｅｂサイトでも，へき地・複式教育についての諸情報や資料などを提供しています。